

求める理由2 —サンプル—

目を覚ました途端、目蓋の重さで寝過ぎたことを覚った。

(今何時……)

閉め切られたままのカーテンに目を向けると、隙間からわずかに漏れ入る光が日の高さを示している。手を伸ばし、目覚まし時計を探る。しかし思うように体が動かないことで先日自分に起きたことを、同時に自分の上にある布団が柔らかく軽いことでここが自分の部屋ではないことを思い出した。

(ああ……やらかした……)

腕と腹筋に力を入れて上体を起こそうと試みる。しかし思うように力が入らず、起き上がることができない。

「んうっ！」

肘をつき、体を左に捻る。しかし自分のものであるはずの足はどっしりと重く、まるで枷をかけられているようだ。

「雅くん」

声のした方に視線をやると、稲垣が本を机に置いてこちらに歩いてきた。すでに身支度を終えている。だいぶ前から起きていたのだろう。

「おはよう、雅くん」

「おはようございます。すみません、寝坊しちゃって」

「寝坊じゃないよ。夜中も体位を変えるのに起きてるから、あまり寝られていないだろう」

ベッドに腰を下ろした稲垣が、雅の頬を優しく撫でた。ついうっとりしてしまうようなその手つきに、心が揺れる。

「——でもそれは稲垣さんの方が……」

数時間おきの体位変換。自分では寝返りを打てないので、同じ姿勢で眠っていると床ずれで皮膚が壊死してしまうのだ。それを防止するために、稲垣は数時間おきに雅の体を動かしてくれていた。

だから申し訳ない——でもこんなふうに優しい目で見つめられると、もつと甘やかしてほしくなってしまう。

「私は雅くんの体を抱いて寝てるから。わざわざ動かしているわけじゃなく、抱いたまま寝返りを打って動かしているだけだよ」

稲垣はそう笑うけれど、人の体を抱いた状態で眠ったまま寝返りを打つなんてありえないだろう。稲垣の優しさは嬉しいけれど、申し訳ない気持ちの方が勝つてしまう。

「……すみません」

「——今ね、」稲垣が視線をデスクに向けた。立ち上がり、本を持って戻ってくる。

「介護の本を読んでいたんだ。雅くんを介護しているつもりはないけどね、お世話の仕方とか、怪我がないようにしたいから」

「……すみません」

「こら」

もう何度も聞いた、優しい「こら」。それほどいつもいけないことをしてしまっているということだけれど、聞くと甘やかされているようで心が温かくなる。頬を撫でる稲垣の手を握り、目を閉じる。

「稲垣さん……」

「かわいい……まだ眠いかな」

「んん。起きます」

稲垣の腕が首の下に差し込まれ、力強い腕にゆっくりと起こされる。

「めまいは？」

「大丈夫です」

それから、ハグ。ぎゅっと抱きしめられて、額にキス。

「——そうだ、それでね、褥瘡^①……床ずれ予防のために自動で動くベッドがあるらしいんだ。それを使おうと思ってるらしいんだ」

「そんなものがあるんですか」

なんて便利なのだろう。それがあれば稲垣の手を煩わせなくて済む。でも電気で動くのだから、高そうだ。それに毎日の電気代もかかる。

「さっき注文したんだ。届くには少し時間がかかるみたいだけど」

「え……でも高いんじゃない？」

お金を持っている人にそんな不安を口にするのは失礼かもしれない。けれどすでに二十万円以上、使わせてしまっている。これからも一緒に生活していく上で、生活費だってたくさんかかるのに。もちろんこの体に慣れたら仕事をしたいと思っている——下半身麻痺な上に、小学校にも行っていない雅を雇ってくれる会社があれば、の話だけれど。

「そのベッドがあつた方が雅くんも遠慮しないでいられるからね。必要なものとして買っただけだ」

「すみません……」

臓器を取り出されて死んでいく——そんなことにならずに済んでよかっただけでなく、こうして大好きな稲垣と一緒に生活できる幸せ。なのにこうして会話をしている間に、心が暗くなっていくことがある。

「こら。そんなに高いものじゃないよ。それに……実を言うと特注したんだ」

「え？」

「普通に売られているものと、小さくて一緒に寝られないから」

「あ……」

「一緒に寝るのは譲れない。いいかな？」

いいか、だなんて——。

「一緒にいいです……」

稲垣は毎日一緒に寝てくれている。いつかはそれが当たり前になるのかもしれないし、もしくはもう大人なんだからと別に寝る日がくるかもしれない。それでも許されるうちは、一緒に寝ていてほしかった。

「よかった。体臭には気を付けてるつもりだけど……もし気になるようだったら遠慮なく言ってね」

四十五歳——雅より……たくさん離れている稲垣は、ことあるごとにこうして年齢差の不安を口にする。けれど雅は稲垣の体の匂いが大好きで、いつまでも嗅いでいたいと思っている。

「ん……」顔を上げ、すん、と首筋の匂いを嗅ぐ。好き。「今日もいい匂いです」

「そう？」少し照れたような声で、稲垣がよかったと笑う。「でも朝のこの時間は一番緊張するね」

後頭部を撫でてもらいながら、恋人であり家族である稲垣の匂いを嗅ぐ。雅にとっては一日のうちで一番好きな時間だ。自分が生きていることも、稲垣に愛してもらえていることも実感できるから。

「ん……ありがとうございます」

満足したら——本当は満足することなんてないけれど——体を離し、トイレに連れていってもらおう。便座に座り、正面に膝をついた稲垣の肩に掴まる。

「今日は——出てないね」

トイレに間に合わなかったときや漏れてしまったときのためにつけてもらっているオムツ。確認されると恥ずかしいけれど、蒸れるとよくないのだから仕方ない。主治医の大田原医師に生活の注意を説明されたとき、床ずれでもひどくなると死んでしまうと聞いて稲垣も顔を青ざめさせていた。だから退院してからも定期的な体位変換や保湿などのケアを丁寧に行っている。

両手はふさがっているの、稲垣にペニスを支えてもらってトイレを済ます。早く自分一人でできるようになりたい。でないと排泄後の陰部の世話までずっとさせてしまうことになる。

「稲垣さん」

「ん？」

ベッドに運んでもらいながら、口を開く。

「僕、自分で生活できるようにになりたいんです」

雅の体を静かに下ろすと、稲垣は厚手の布団を雅の下半身にだけ掛けた。

「それは、ここを出て一人暮らしをしたいという意味ではないよね？」

「違いますっ！ 違うよ……?」

家族だから敬語は使わない——思い出して言い直すと、稲垣はふわりと笑った。「それなら安心だ。でもリハビリはもう少したくさん寝られるようになってからか

な。体力を使うからね」

「え……でも寝過ぎなくらい——」今日だって寝坊したのに、と思いつながら気が付いた。「……もしかして僕、まだうなされてますか」

稲垣の腕の中で夢も見ずに眠っていると思っていたけれど。

「それは……うん、たまにね」稲垣が眉尻を下げて笑う。

「ごめんなさいっ！」

体位の変換以外にも迷惑をかけていた。それに稲垣が寂しそうなのは、雅がここでの生活に気を許せていないから——と思われているからだ。大切に、守るように抱きしめてもらって眠りについていっているというのに申し訳ない。

「いや、私はいんだよ。でも雅くんの体が心配だし……とても怖い思いをしたんだから仕方ないことだよ」

「でも……」

もう、眠ってもちゃんと目が覚めるとわかっている。そのまま死ぬことなんてない——頭では。

「いいんだよ。それよりご飯にしようか。食べるのもリハビリのうちだ」

「……はい」

本当は身請けされたらご飯を作るつもりでいたのに、今はただ用意してもらったご飯を食べるだけ。シンクの高さが合わないから洗い物だつてできないし、食器棚に片付けるのも手が届かない。

（僕は何をしているんだろう……）

気分的高低差が自分でも苦しい。稲垣と過ごせて幸せだと思っているのに、ふとしたときに「あのまま手術されていればこんな負担をかけなくて済んだのに」と思ってしまう。

「……そうだ！ 絵本があるんだった」

「え？」

唐突に言った稲垣が机から紙袋を持ってきた。取り出されたのは、動物が描かれた二冊の本。一冊はピンク色のぶたがホットケーキをおいしそうに頬張っている表紙のもの。もう一冊は犬が寝そべっている表紙のもの。

（かわいい……）

どんなお話なんだろう。

「幼すぎたかな」

稲垣が苦笑した。でも絵本なんて読んだことがない——おずおずと手を伸ばし、ページを捲る。

（全部ひらがな……）

でも、読めない。時間をかければ読めるかもしれないけれど。

（あ……「あ」……の次は……えっと……あいうえおかきくけ……）

読みたい。読んでみたい。読めるようになってみたい。絵もかわいいけれど、そ

れよりひらがなが読めるようになって、いつか漢字も覚えてみたい。

「——ごめんね、何かもつと雅くんの年頃の男の子が好きそうな雑誌でも——」
スツと本が手から抜かれた。

「あつ」驚いて、つい稲垣をきつい目で見てしまった。

「あ……ごめん、読んでた？」

「……すみません、いえ……読めないんですけど……読んでみたいなって……つて
いうか、読めるようになりたいなって……」

「ああ……そうか、ごめんね。じゃあ私が読んであげるよ。それで覚えていったら
いい」

「いいんですか？ でもお仕事が——」

「いいんだよ。じゃあ……ご飯を持ってくるから。絵を眺めて待っていて」

そうだった。ご飯を食べようという話だった。

(僕って……なんか変……)

さっきまで落ち込んでいたのに、そんなこともすっかり忘れて絵本に夢中になっ
ていた。稲垣がこれを出してくれたのだから、気持ちが落ち込んでいることに気付
いてのことだったのに。

(ごめんなさい……)

振り回してしまっている。今の自分は店にいた自分とまったく違う。こんなふう
では稲垣に面倒くさいと嫌われてしまうかもしれないのに——。

* * *

パリッとしたシート。暗い照明。大きなテレビ。部屋全体にたばこのにおいが染
み付いている。男女が快感を食ひ合うために作られた町外れのラブホテルの一室で
シャワーも浴びず、レオナは男とベッドに座っていた。

「そうなんだ……」レオナは意識して暗い声を出した。「ご両親に捨てられたから、
指名が多い僕が羨ましかったのかな……」

「たぶん、そうだと思う……」

臓器売買をしていること、そして次に順番が来るのが雅であることを神宮寺に話
したことで、雅に対してのこれまでの行いの罰としてオーナーに強制退店させられ
てから一週間。熱狂的な客はレオナを探し、新しい店まで追いかけてきてくれてい
た。

雅の過去を調べてくれたこの男——天城もそのうちの一人で、もう付き合いは三
年になる。レオナのペニスをやぶるのが好きで、勃起していようとしていまいと、
時間いっぱい口を含み続けるのが趣味。舌使いは巧みだが、目的が射精ではないゆ
えに微細な愛撫が多く、レオナは毎回頭を鷲掴みにして腰を振りたい衝動にこらえ
るはめになっていた。きつと、そうしたいとレオナが言えば天城はそうさせただろ

う。喉に亀頭を嵌め込ませても文句の一つも言わないにちがいない。それほどまで、レオナに惚れ込んでいる自信があった。

「雅くんが長く寮にいてるってことは知ってたんだ。僕が寮に入ったときにはすでにいたし……でもまさか九歳で買われていたなんて」鏡が見たくなった。自分は今、ちゃんと悲しい顔を作れているだろうか。◇

そんな心境にも気付かない天城は悲しそうに視線を落とし、それから思い直したように眉を吊り上げた。

「うん……確かに可哀想だと思う。でもさ、だからってやっていいことと悪いことがあると思うよ。自分が注目されなくて寂しいからって、オーナーに同情で優しくされてるからって、レオナくんに襲われたなんて嘘をつくのはひどすぎるよ。そっちを信じるオーナーもオーナーだし」

「……ありがとう。でもオーナーは優しいから……」

天城の首に腕を回し、太ももの上に腰を下ろす。けれどまだ大事なところは重ねない。腰を引いた状態で張りのない四十路の頬に肌をこすり付ける。天城はそれだけで熱い吐息を漏らした。

「レオナ……」

「でも天城さんがこうしてわかってくれてるから……」

必要な情報は得た。レオナはぐつと腰を押し付けた。「ンッ」と喉の奥を鳴らしながら腰を揺らすと、天城のそこが徐々に硬くなっていく。

「あ……レオナッ」

「ン……天城さんのもう硬くなったあ」

甘えるように語尾を伸ばし、首に唇をこすり付ける。

「レオナがいたずらするから」

「ンッ……だつてえ」

「でもレオナのはまだ——」

起っていかない。でもこれでいいのだ。だつて落ち込んでるふりをしていただけから、すぐに勃起してしまつてはおかしい。愛をねだるように強く腰を押し付ける。

「ンッ……天城さんのお口で硬くさせてほしいの」

「いいの？ ペロペロしても」

今日は休日。本当はペニスを休ませたかったが仕方ない。

「してほしいの。でも今日はいつもみたいに先っぽからなんて焦らさずに、根本までばくつしておちんちん全部温めてほしい……」

あまり時間をかけられるとつらい。お金になるわけじゃないし、早めに帰宅して作戦を練りたい。

(まさか両親の現住所や仕事の状況までわかるなんて)

調査会社を経営している友達がいると言っていたからダメ元で頼んでみたけれど、想像以上の収穫だった。

天城の首に腕をかけたまま引きずり込むようにしてベッドに寝転がり、もじもじと膝をすり寄せる。

「早くっ」

待てないのだとアピールするために自分でデニムのボタンを外す。店ではないのでセクシーランジェリーではないが、ピタツと肌に張り付くボクサーパンツはペニスや陰囊の形をくつきりと浮かせているはずだ。

「ああ……こういうのも穿くんだね」

天城の視線がレオナの陰部に釘付けになった。店に入ってすぐの頃はこういう視点だけで期待に勃起していたけれど、半年もすれば見られるのは当たり前になり、すくと羞恥心もなくなった。

「今日はプライベートだから普段の恰好で来ちゃったけど……いつもみたいなかわいくてえっちなパンティの方がよかった？」

「パンティ……」

噛み締めるように呟いた天城はボクサーパンツを脱がせることなく、柔らかいままのそこに顔面を押し付けた。ぎゅつとペニスが潰され、快感を拾う。

「あんっ」

「すごい……」

「何……？」

「すごいえっち。お店のパンティも好きだけど、レオナの普段使いの下着を見られるなんて」

「やだ……そんなふうに言われると恥ずかし——アッ！」

天城が突然下着越しにペニスをしゃぶった。布を一枚通しただけでこんなにも愛撫が違っただけに感じられるなんて。

（やばい、気持ちいい……）

もっともっと股間を押し付けたい。調べてくれたお礼で少しフェラチオをさせてあげるだけのつもりだったけれど——店ではできないけれど今ならプライベートだし、いいだろうか。

「天城さんっ！ それ気持ちいいっ」

「ん」

くぐもった返事がほんの一瞬でも顔を離したくないという意思の表れのように興奮する。手を伸ばし、白髪の混じり始めた後頭部を両手で押さえる。

「天城さん……僕えっちなになっちゃうっ、男の子になっちゃうっ」

少しだけ腰を押し付けてみた。するとそれに応えるように天城が左右に首を振って刺激を増やす。

「ひあっ！ ダメッ！ すごいっ、気持ちいいっ」

ペニスは完全に起ち上っている。天城の唾液と自身のカウパーでぐしょぐしょになった下着を脱がせてほしい。でもそうすればいつもと変わらなくなってしまふ。

「おちんちんすごいっ！ 天城さんのフェラチオ大好き！ もっといっぱいしてえっ」

もう腰の動きは止まらなかつた。勃起を天城の口にこすり付け、目を閉じて夢中で快感を食る。

「すごいっ！ すごいのおっ！」

頭にオーナーの姿が浮かんだ。目を細めてレオナを見つめ、髪を梳くようにして頭を撫でながら言う。お休みの日なおちんちん上手に勃起させて偉いね——店の外で客に会ってはいけないというルールを破った罪悪感快感で打ち消した。

* * *

「雅くん、もう寝る時間だよ」

「はい」

ぶたの絵本を閉じ稲垣に手渡す。本当はもっと読んでいたかった——稲垣が読んでくれた音を忘れる前に、何度でも見返しておきたかったけれど仕方ない。稲垣が、雅が寝たあとに仕事をしているのはなんとなく気付いていた。

「読みながら寝ようか」

「え？」

「隣で読んであげるから、それを聞きながら眠ってごらん」

「そんな……」

「いいんだよ。そうやって寝る小さな子どもも多いから」

「でも子どもじゃないですよ」

今日だけで十回以上読んでもらってしまった。稲垣は頭がいいからもう文章を覚えてしまっただろうし、音読だって飽きただろう。

稲垣が開いていた本を閉じた。やっぱりもう一度だけ読んでと素直になればよかったなと後悔しながら目を閉じる。

「おやすみなさい」

「雅くん」

「はい？」

目を開けると、思っていた以上に近いところに稲垣の端正な顔があった。

「私は雅くんをたくさん甘やかしたい。雅くんがうんざりするほど甘やかして、小さい頃に経験できなかった子どもらしい時間を今からでも経験させてやりたい」

「稲垣さん……」

優しい人。嬉しい。好き。大好き。でもこの気持ちは言葉にしても伝わらないよな気がした。

「まあ、子ども扱いしながらもえっちなことだってするけどね」

「えっ、えっ、」

えっちな店で知り合った。けれどこうして家でされる方が恥ずかしい。

「そこはほら、恋人だから」

大好きな恋人の男の顔。目にじんわりとにじむ色気にくらくらする。

「それは……僕もしてほしいです」

「えっちなこと？」

「はい」

だって初めてペニスで気持ちいいと思えるようになったのだ。セックスとなると準備に片付け、行為中に足を抱きかかえてもらうなど稲垣の負担になることが多いから、雅からしてほしいと頼むことはできないけれど、キスをしながら乳首をこちよこちよしてもらって……それから稲垣の大きなペニスと一緒に握ってもらうのはすごく好き。

「しまったな」稲垣が困ったように頭を掻いた。「絵本で寝かしつけをしてあげるつもりだったのに」

その言葉の先は言われなくてもちゃんとわかる。

「僕……」

「うん？」

「えっちなことをしてもらって、稲垣さんの匂いとか体温とかいっぱい感じながら寝るのも寝かしつけしてもらって思ってます」

稲垣がしたいと思ったときにはいつだってしてほしい。我慢も遠慮もせず激しい衝動のまま求められたい。

「——そんな言葉、いつたいどこで覚えてきたのかな。雅くんが射精しても私がいくまで止めてあげられないかもしれないよ」

「あつ……」

脳内では足をもじもじと動かしているのに下半身はピクリとも動かない。それでも感覚が残ってるだけまだマシだけれど、どうにももどかしい。

「雅くん……」

稲垣の目が肉欲に濡れている。見つめられるだけで体が熱くなっていく。

「稲垣さん……」

もう我慢できないと思った。ペニスをいじってほしい。稲垣の勃起をこすり付けてほしい。

むしゃぶりつくように唇を食べられ、お腹から這い上がってきた手が的確に乳頭をこねくり回す。

「んっ！ ンウツ、つぶ」

あまりの快感に空気が鼻から抜けていく。吸う間もない。しかし唇はまだ稲垣の口の中にある。

「ンンッ」

酸欠でクラクラする。空気が欲しい。それなのに体は更なる快感を求め、離れな

いでほしいと勝手に両腕が稲垣の頭を抱き寄せる。もうだめ——気が遠くなりそうだった。それでも気を保っていられるのはわずかながら鼻で呼吸ができているからだろう。

(好きっ、好きっ！)

稲垣の硬いものが雅の小さな勃起を押し潰した。いつでも優しい稲垣の力強い動き。今度は酸欠ではなくその男らしさにめまいがする。

(もうだめっ……！)

限界を感じ、肩を掴んで腕を伸ばす。

「稲垣さんっ」

もう射精したい。稲垣に射精させてほしい。視線でねだると稲垣は欲に塗れた表情のまま雅のズボンを脱がせた。しかしオムツのテープを剥がす前にその手が止まる。

「稲垣さん……？」

「えっちなことをしようとするときにオムツを見ると興奮するね」

「え……？」

「お店で雅くんがつけてたランジェリーもすごく魅力的だったけど、オムツもよく似合ってる」

「やっ……恥ずかしい……」

「雅くんはそうかもしれないが、本当に興奮するよ。おしっこの管理もうまくできないのにこの中にあるおちんちんは白いの出すんだなって開く度にそんなことを想像してしまう」

「や……えっち……」

「うん。えっちだから出会えたんだよ」

「稲垣さん……」

行為中の会話が楽しいと思えたのは稲垣だけだった。店では行為に及ぶ前にチェンジになるか、もしくは行為に至ったとしても強くされたらどうしようとか、痛いのが怖いとか、そんなことばかり頭の中をぐるぐると回っていた。でも今は話す内容自体も楽しいし、焦らしの時間としても楽しめている。それに話している間も、稲垣はすりすりど勃起をこすりつけてくれていたから。

「また今度——私が選んだランジェリーもつけてくれる？」

ちゅ、と唇を吸われる。

「汚しちゃうかも……ンッ」つけたいけれど。

言葉の合間に唇がふさがれ、ペニスの奥がむずむずする。

「それはどんなふうに汚すのかな」

ぐっと腰を押し付けた状態で、稲垣が雅の耳を食んだ。頭の中がぼうつとなつてとろけていく。

「ん……黄色いのと白いの……」

「かわいい言い方だね。えっちなことをしていると雅くんは幼くなる」

「あ……ごめ——」

「かわいいって言ってるんだよ。もともと甘えん坊になって」

「いいの……？」

「なってほしって言ってる」

「うん……いっぱい甘えん坊したい」

どろどろにとけたい。液体みたいになって稲垣と混ざり合いたい。

「嬉しいよ」

「アッ！」

稲垣が雅のパジャマのボタンを外し、むき出しになった乳首にむしやぶりついた。もう片方はくにくくと指先でこねられ嬌声上がる。

「ひあっ！」

気持ちいい。でももう射精したいのに。

「今よりおちんちんが敏感な頃だったら、今頃オムツの中で射精していたのかな」

「あっ、あっ」

「今もできそうならしていいよ？」

「無理っ！ そんなっ！」

しかし稲垣は腰をゴリゴリと押し付け、硬いものでペニスを刺激し続ける。

~~~~~

乳輪ごと強く吸われ、その状態で膨らんだ乳頭の先を舌で叩かれる。乳首への愛撫は普段もつと優しいのに——手に込めている力と連動しているのだろうか。乳首だから強くされても以前のペニスのように恐怖心を抱くことはないけれど、それほどいじられてもまだ射精は訪れてくれない。

「やだあ！ イきたいっ！」

本当にイきたいのに。出したいのに。もう気持ちよくなりたいというより楽になりたいという気持ちの方が近かった。

「苦しいよお！」

「雅くん」

稲垣が顔を上げ、雅を見た。苦しそうな、つらそうなその表情を見て、稲垣はずつとお預け状態になっていたことを思い出す。

「ごめんなさいっ！ 僕はもういいから——」

だってイけそうにない。気持ちいいという感覚も薄れてきてしまっているような気がする。

「イけない？」

「イきたいけど出せない……」

どうしてなのかわからない。性欲もちゃんと感じられているし心も興奮しているのに。

「大丈夫、落ち着いて。ちゃんと出せるよ」

「稲垣さん……」

「目を閉じて、深呼吸して」

言われたとおりにすると体を横向きに転がされた。稲垣が背後に寝転んだので顔が見えなくなる。

「稲垣さん？」

「大丈夫、ここにいる。こっちからするよ」

「あっ！」

背後から伸びてきた手が雅のペニスを握った。裏筋とカリを重点的にこすられ、親指で尿道口をこねられる。向かい合ってされるのはまた違った角度で指が触れて気持ちいい。

「稲垣さんっ、稲垣さんっ！」

「乳首いじってあげられなくてごめんね。自分でしてごらん」

「やっ……」

そう言いつつ手は勝手に動いていた。乳首に残った稲垣の唾液をローション代わりにして乳頭を弾く。

「ああっ！ アアッ！」

「上手だよ。ちゃんと気持ちよくなれてるね」

「あっ、アッ！」

「もうすぐ出るよ」静かな声。すぐ耳元で稲垣が言った。「子どもみたいに小さくて皮被りの雅くんのおちんちんから精液が飛ぶよ」

「アッ……あ……あ……」

まるで脳に直接話しかけられているみたい。そして体はその言葉のとおり射精の準備を進めていく。

「精液が出るときはなんて言おうか。かわいくてえつちなことを言えるかな」

「やだあ、わかんないっ！」

何がかわいくて何がえつちなのかななんて知らない。それにもう頭が回らない。イきたい。出そう。なのに、射精のときの言葉が決まるまでイかせないつもりなのか、

稲垣は抜く加減を調整しているようだった。

「雅くんはいつも言ってるよ」

「知らないっ、わかんないっ！」

それは口から勝手に出ているだけで考えて発しているわけではない。ただ偶然稲垣の好みに合っていたというだけの話。それに体が射精の準備を始めている今、イくときの言葉を考えるなんてできない。「嫌」「無理」と首を振ると背後で稲垣の笑う気配がした。

「ほら、でももうイっちゃうよ？ 雅くんのおちんちんから白いの出ちゃうよ？」  
そういうことを言うのはずるいと思う。だって射精のタイミングまで稲垣に教えてもらっている——決められているなんていやらしすぎる。

「ああ……ああ……」  
イきたい。苦しい。

「あと十秒ぐらいかな。思いつき気持ちいい射精をしようね」

「あっ、あっ」

「あと八秒……何て言いながらイク？」

「やっ、あああっ！」

「五、四、三……」

ずるい。ひどい。もう無理——。

「二……」

「子どもちんちんから白いの出るっ！ 稲垣さんの手コキでイっちゃ——あああ  
あああ！」

精液は、亀頭を包むようにして稲垣の手が受け止めてくれた。

「上手。ちゃんと精液出せたね」

「ん……はあ……」ちゃんと返事をしたい。けれど少しも息が整わない。「いな、が……」

「話さなくていいよ、大丈夫。このまま寝ちゃおうね」

「え……でも」まだ稲垣はイっていない。

「明日、病院に行こう」

「え」

「もう一度検査してもらおう？」

「……はい」

稲垣も気付いていた。雅の下半身は事件直後よりも確実に感覚が鈍くなってきた。認めたくはないけれど、稲垣に強くいじってもらってもスムーズに射精できなかったのだから否定のしようがない。

「稲垣さん……」

たぶん、もうダメなのだろう。だからきつと、これが最後のチャンスだ。

「うん？」

「入れて……」

「でも——わかった」

洗浄はしなかった。横を向いた体勢で手袋をつけた指でほぐしてもらい、稲垣の準備が整うのを待つ。

「雅くん」

「ん……」

「体勢は大丈夫？」

「はい」

まだ、わかる。中で稲垣の指が動いているのを感じられていた。

体を仰向けに戻された。すぐ上から、熱のこもった視線が降り注がれる。

「入れるよ？」

「はい。お願いします」

怪我をしたとしても感じられる痛みは少ない。だからこそ気を付けないといけないんだよと稲垣は言ってくれるけれど、今はとにかく——最後になるだろう快感のある行為を心と体に刻みつけてほしかった。

「ん……あつ……」

大きなものが肉をかき分けるようにして入ってくる。

「ああ……気持ちいいよ」

「ん……僕もっ」

以前ほどの快感はない。でもちゃんと稲垣のペニスの存在がわかる。

「つらかったら言うんだよ」

「んっ！」

様子を見ながらのゆっくりとした動き。稲垣らしい、気遣いのセックス。

「かわいい。雅くん、愛してる」

「んっ、僕も好きっ！ 稲垣さんっ、好きっ！」

手や口での愛撫でも、セックスの一つと言えるだろう。キスだけでも感情を伝えることはできる。けれどやっぱり、こうして繋がるのは少し違う。

「まずいな、すぐにイキそうだな。自分でするときにはこんなに早くないんだけどな」

「稲垣さん……」

やっぱり一人でしてたんだ、という申し訳なさと、オナニーよりセックスの方が気持ちいいと言ってもらえる悦びを同時に感じる。

~~~~~

エレベーターホールでは買い物袋を提げた男性が箱の到着を待っていた。すでにボタンが押されていたのでほどなくして一緒に乗り込む。箱は音もなく昇っていた。しかし途中、むわっと鼻につくようなにおいが漂ってきた。

(え？ ……あ、うそ……まさか……)

便のおいだった。こんなところで漏らすなんて自分しかない。それにおいもすぐ近くから感じられる。

男性が体を揺らした。においに気付いたのだ。

「……ごめんなさい」

こんなところで漏らしてしまうなんて。それにどうして。

男性は何も言わなかった。元々押してあった階に止まると雅を見ると足

早に降りて行く。

「……雅くん」

「稲垣さんっ……」

混乱した。幸いなのは、お尻に排泄物がつく不快感すら感じられないことだろうか。

「大丈夫。今日は検査で疲れただろうし、お風呂に入ってベッドでゆっくりしようね」

換気扇がついているとはいえ、狭いエレベーターの中。稲垣だって臭くて呼吸もしたくないだろうに。

「ごめんなさいっ……」

恥ずかしかつたし、自分の体が急に変わってしまったようで怖かった。男性にも稲垣にも申し訳ない。それにこのあとにエレベーターを使う人はいったいどう思うだろう。それまでにこのおいは消えるだろうか。

チンという軽い音を立てエレベーターが止まった。稲垣に押しもらい、廊下に出る。

「におい、どうしよう……」

「換気扇がついているから大丈夫。それよりお尻が気持ち悪いね」

「でも——」

「大丈夫だよ。平日の昼間はエレベーターを使う人自体少ないから」

足さえ動けば——そうすれば消臭剤を稲垣に借りてエレベーターに戻ることができたのに。

「うう……」

申し訳ない。故意ではないし、どうしようもなかったと頭ではわかっている。乗り合わせた男性だってきつと気付いていながら、仕方ないと思ってくれただろうと思う。それでも——。

稲垣はすぐにお風呂に入れてくれた。外されたオムツにはやはり便が出てしまっていて、さっきのおいが勘違いではなかったことが明らかになった。でもどうして。便意も、出ている感覚もなかったのに。

「お腹、痛い？」

「いえ……」

「疲れ……ストレスかな。今日のご飯は消化にいいものにしようね」

「大丈夫です、ごめんなさい……」
シャワー椅子の上で手すりを持って頭を下げる。上半身はちゃんと動くのに、どうして足は動かないのだろう。いや、上半身だけでも動いてよかったと思うべきか。

「——雅くんの育ったところはたくさんの人がいて個人に食べ物合わせるなんてできなかつたかもしれないけど、ここは二人きりだよ？ たまには栄養なんて気にせず食べたいものを食べたり、体調に合わせたり……ケーキをご飯にしちゃった

りすることがあってもいいと思うな」

「稲垣さん……」

「うどんか雑炊か。どっちかにしよう」

「……稲垣さんはどっちがいいですか」

「どっちも食べたいな。どっちも用意しようか」

「え、でも」

「作るのには私じゃないから大丈夫」

「え？」

「絵本を読んであげたいし、今日のご飯は人に頼む。ベッドでご飯が届くのを待つていようね」

体を洗い終えるとお湯に入れられた。しかしもし浴槽の中でまた漏らしてしまったらと思うと怖くていられなかった。温まった方がいいという稲垣に頼み込み、数十秒で出してもらおう。タオルで体を拭いてもらおうときだつて怖かった。とにかく早くオムツをつけてほしい。もう恥ずかしいなんて言つてはいられない。けれど稲垣は「大丈夫」と言いながら丁寧にローションを塗り込んだ。

届けられたご飯を食べて、夕方。夜ご飯も稲垣は外に頼んでくれて、別の味のお粥を食べた。その間、恐怖心から何度もオムツを確認してもらつて——一度も尿意も便意も感じなかったのにオムツを替えられたときはあーもう本当にダメなんだなど泣きたいような気持ちになった。それでも稲垣は嫌な顔一つせずオムツを替え、布団を掛け直してくれた。

「寒いかな」

「いえ、大丈夫です」

「じゃあ、足の方だけでも一枚掛けようね」

ずっと感じていた腰から下の冷えた感じ。けれどそれはいつの間にか感じなくなつていた。

「……大丈夫です」

いったいいつから感じていなかったのだろう。寒気を覚えていてもその度稲垣が気付き、布団を掛けたり抱きしめてくれたり温かい飲み物を用意してくれたり……そんなふうに大切にしてもらつていたからほとんど気にならなくなつていた。

「遠慮はいらないよ」

「違うんです……何も感じない」

「え？」

「あんなに寒いつて……足が冷たいつて思つてたのに……何も感じないんです」

「……そう」

絞り出したような声だった。思わず稲垣に顔を向けると表情を確認するより先に抱きしめられた。胸に稲垣の匂いが充満する。「ずっと一緒だから」

「稲垣さん……」

自分の声が震えていた。

~~~~~

自動で開く門を抜けると車が止まり、後部座席が開かれた。車椅子ごと引っぱり出してもらい、正面の建物を見上げる。

「わ……」

大きな建物だ。レンガできていて頑丈そう。少し前に稲垣に読んでもらった賢いぶたの家みたい。掃き出し窓のような、中が見える窓はない。何屋さんかわからない。看板もないし——玄関のところに行くと言った表札があった。

「稲垣……？」

「稲垣組、と書いてあるんだよ」

「ぐみ、ですね」

稲垣の漢字は教えてもらっていたので読めたけれど、続く漢字は難しかった。お菓子みたいな読み方、と頭に刻む。そうすれば、もし忘れてしまっても思い出しやすい。

玄関が内側から開かれ、坊主頭の男性が姿を現した。真っ黒なスーツ。体も大きくて、ぎろつとした目が少し怖い。

「あ……こ、こんにちは……」

今って昼だっけ、こんにちはでいいんだっけ……初めましてって言った方がよかつたんだっけ——頭の中がぐるぐるになると、男性がぐつと腰を折った。

「はじめまして！ 安田といいます！ ヤスと呼んでください！」

「えっ……」

怒鳴るような大声。圧倒され、背もたれに背が貼りつく。

「おい。雅くんが怯えているだろう」

「申し訳ありません！」 どうやらこれが普段の話し方らしい。

「やつ……あのっ……」

「ようこそいらっしやいました！ 組長とお楽しみのところ申し訳ございません！」

「組長……？」

社長のことだろうか。まさかそんな偉い人だったなんて。仕事を休ませてしまつて、みんな大変だったのではないだろうか。

背後を見上げると、稲垣が困ったような表情を見せた。

「……雅くん、中に入ろう。バリアフリーではないから、抱えるよ」

軽々と抱き上げられ、中に運ばれた。後ろでは安田が車椅子を壁際に寄せている。

「すみません」

「いえ！ 軽いですから！」

たぶん、優しい人ではあるのだろう。ゴリラのような迫力はあるけれど。玄関に置いておくのは邪魔になって申し訳ないなと思っていると、天井の角にいくつもの監視カメラがついていることに気が付いた。

(一つ、二つ、三つ……)

角度を変えて、玄関をたくさん撮っているようだ。窓もないし、防犯に力を入れているのだろうか。

(……そういえば……)

「稲垣さん」

「うん？」

「七の次って何だっけ？」

「なあ？」

「一つ、二つ、の七」

「ああ、『やつ』だよ」

「あ、そっか……あれ？」

「次は『このつ』だね」

「あ、そうだ、それだ。で、とお！」

「正解」

ひらがなと数の数え方と足し算。普通の人が十年以上もする勉強を何一つしてこなかったのだから、今からたくさん頑張らないとついていけない。

「さあ、ここだよ」

両開きのドアの前に男性が一人立っていた。「お疲れ様です！」と安田のような力強い声で言い、ドアが開けられる。

「すみません」

稲垣の手がふさがっているせいで手間を取らせてしまった。わざわざ待たせてしまったようだし。

しかし男性は何も言わなかった。両手を腰に回し、背筋をピンとさせて前を凝視している。何かあるのだろうかと視線の先を追ってみても、ベージュの壁紙があるだけだった。

部屋の中にはグレーのスーツを着た男性が待っていた。今立ったようには見えなかったたので、今か今かと稲垣の到着を待っていたのだとわかる。

(途中で止めさせちゃったから……)

仕事のトラブルで急遽来ることになったのだから、急いでいるのは当然のことだったのに。遅くなつたのは自分のせいだときちんと詫びなければと口を開いた瞬間、まったく同じタイミングで男が頭を下げた。

「お疲れ様です」

「ああ」

稲垣が鷹揚に頷く。偉い人のしぐさだ。雅には一度だつてこういう態度を取った

ことがなかったので、驚く。

「——初めました。雅さんですね。橋爪と申します」

「あ、は、はじめまして」稲垣の腕に抱かれたまま頭を下げる。「あの、すみません、僕歩けなくて」

「はい、承知しております」

「飲み物を」会話を遮るように稲垣が言った。

「いちごミルクでよろしいですか」

「えっ、あ、いえ、おかまいなく！」

どうしていちごミルクが好きだと知っているのだろうか。言ったの？ と稲垣を見上げると、額に唇をくっつけられた。

「少しだけ待っていてね」

「は、はい……それはもちろん……」

顔が熱い。だってここには橋爪がいるのに。

「ありがとう」

「ケーキをご用意しておりますが」

「昼がまだだ」

大きな机の前に置かれたソファに下ろされた。足の位置を直してくれた礼を言い、背を背もたれに預ける。

「では何か——」

「ハンバーガーは冷めるとまずくなるから、また後日でいいかな」橋爪が話していたのに、聞こえていないかのように稲垣が言った。

「え、あ、はい……」

無視した……のだろうか。それとも聞こえなかったのだろうか。

「パン屋に行く予定だった」稲垣が橋爪に端的に言う。

「承知いたしました」頭を下げた橋爪が部屋から出て行く。雅には笑顔を見せたのに、稲垣にはそれが無い。

（仲が悪い？ つてことはないよね……？ 喧嘩中とか……？）

職場だからか、稲垣もいつもよりピリツとして見える。雅に対してはいつもどおりだけれど、仕事モードになっているのだろうか。

「ごめんね」

「え、そんな！ 何も……つていうか、僕のことには気にしないでお仕事してください」

「あー……うん、ありがとう」

奥歯に物が挟まったような言い方だった。そういえばここに来る前も何か言いかけていたなと思いつく。

「稲垣さん？ 何かありました？ もし邪魔だったら僕は——」

「いや、そうじゃないんだ。ただ私の仕事がね——」

ノックの音がして、話の続きは聞けなかった。稲垣が応答すると、安田が入ってくる。

「雅さんのお飲み物をお持ちしました」

「ああ」

「……すみません、ありがとうございます」

せっかく話が聞けそうだったのに。安田は雅の前にグラスを置くと、ドアには向かわず稲垣の机の横に直立不動で立った。どうやらこのまま仕事の話をするらしい。しかし、二人は一向に話を始めなかった。橋爪を待っているのだろうか。

「あの……」

「ん？」

「いえ」

安田がいると思うとどんな話をしたらいいのかわからなかった。普段ならいつも、何でもない話をしているのに。

(絵本、の話……はしない方がいいよね……)

買ってもらったばかりの絵本を読もうかとも思っただけれど、この空気の中で絵本を読む気にはなれなかった。

(普段なら稲垣さんも話しかけてくれるのに……)

もう仕事のことを考えているのだろうか。隣を見れば視線は合わせてももらえけれど、困ったようにほほ笑まれるだけで口を開こうとはしない。

(会社だし、静かにしておこう……)

しばらくぼうつとしてしていると、ノックの音が鳴った。今度は誰だと思ったら橋爪だった。雅に視線を向けると「こちらをどうぞ」と言っただけで、雅の前のテーブルにパンの香りの立つ袋とおしぼりを置く。

「あ、すみません……いただきます」

「もしお好みのがなければ言ってくださいね」

頭を下げると、橋爪は安田の隣に立った。稲垣もソファから腰を上げると雅の頭をひと撫でし、「食べていて」と言っただけで本来の席に着く。

(……ふう……)

なんだか息が詰まった。お店と同じ作り方だと一目でわかるいちごミルク。グラスを持ち、稲垣たちの方を見ないように意識しながらストローを吸う。

「……それで？」

「斎賀組の跡目争いの件ですが、このままだと抗争に発展するかと思われます」

組。跡目争い。抗争。橋爪が発したのは、雅でも聞いたことのある単語だった。

「抗争はさせられない。派閥の割合はどうなってる」

稲垣の問いに安田が答えた。

「一時間前に、落合から連絡が入りました。割合は六対四で変わらないのですが、秋元は跡目が取れなければ独立すると」

「何？」

鋭い稲垣の声。思わずそちらを見てしまう。

稲垣は立ったままの二人を下から睨みつけるようにして見上げていた。普段、雅の視線に気付かないなんてことはないのに今は少しの意識も向けられない。

「意地になってきているようです」

「そこまで対立した理由は？」

難しい話が続いていた。よくわからないけれど、どうやら稲垣は——ヤクザらしい。

(僕……結局ヤクザに……)

ヤクザに買われるよりは、オーナーに買われて店に入った方が——たとえその先に待っているのが「臓器」だったとしても——幸せだと言われて育った。ヤクザの元へ行けば、下手を打ったヤクザの代わりに小指を取られる、人を殺したヤクザの代わりに自首させられて刑務所に入る、ヤクザがした悪いことを自分がしたことにして対立しているヤクザのところに謝りに行く、お金を稼ぐために漁船に乗せられる、誰かが殺した人を埋めに山に行かされる——パツと思いつくだけでこれだけある。意味がわからなくてそのまま忘れてしまったことも含めれば、もつとたくさんあったらう。それくらいヤクザのところは怖くて、つらいところだと知っている。なのに、結局ヤクザに買われてしまった。

(……でも……稲垣さんだし……)

とても優しいし、大切にしてもらっている。このいちごミルクだって、きつと稲垣が雅の好きなものと会社——組の人に教えておいてくれたということだろう。忙しいはずなのにずっと家にいてくれてるし、高級なベッドだって買ってくれた。勉強も教えてくれるし、上手にできたらたくさん褒めてくれる。

(……でも、稲垣さんも人を殺したりすること……?)

指は十本すべてある。一緒にお風呂に入ってもらうので裸だつて見たけれど、背中に入れ墨が入っているわけでもなかった。出掛けてもお店の人に嫌な態度を取ったりしないし——思い返してみてもどんなときでも稲垣は優しいばかりで、これまで聞いてきたヤクザとはイメージが重ならない。

(じゃあ、ヤクザじゃないってことかな……)

かっこいいから、みたいな理由でそういう言葉を使っているだけかもしれない。

「あいつ、カタギに手を出したのか」

「はい。しかし現組長は——」

しかしどう聞いても、雅の知るヤクザという人たちの会話だった。

~~~~~

ヴヴヴ……という低い音で目が覚めた。なんだろうと思っていると、勝手に頭が

動く——枕になってくれていた稲垣の腕が抜かれたのだと気付く。

「ん……」

「ああ、ごめん、起こしたかな」

「……稲垣さん？」

目をこすり、眠気を覚ます。窓の外はもう真つ暗だった。壁時計を見ると十九時。セックスが終わしたのは……何時だっただろうか。

「ごめんね……」

「え？」

「少し出ないといけない」

「でる……？」

「うん、仕事の呼び出しがあつて……なるべく早く戻るから」

「おるすばん……」

そんなことは初めてだ。いつも一緒に、仕事関連で離れるのは電話で別室に行くくらい。

「うん……そんなに遅くはならないから。ごめんね」

眠気がスツと覚めてきた。別に少しくらい一人になつても平気だし、何より稲垣は仕事なのだ。でも、なんだかとても寂しい。

「ん、大丈夫。気をつけて行ってらっしゃい」

もう一度「ごめんね」と言った稲垣は雅のオムツをチェックし、濡れていないとわかると頭を撫でて部屋を出て行った。本当はついて行きたかったけれど疲れていたし、邪魔をすることはできなかった。

しかしその十五分後。

見るともなく見ていた絵本を閉じ、ヘッドボードに置かれた電気のリモコンに手を伸ばした。しかしどうにも届かない。ずりずりと両手を使ってお尻を引きずりながら移動していると、玄関のチャイムの音が鳴った。

（稲垣さん？）

もう帰ってきたのだろうか。それとも忘れ物だろうか。会社を出る前に電話するよと言っていたけれど、それより先に急いで帰宅してくれたのかもしれない。もしかしたら移動中、やっぱり一人にはしておけないと思ひ直してくれたのかもしれない。どうしたのかはわからないけれど、戻ってきてくれたのが嬉しかった。

（あ、お出迎えしよう！）

連絡はなかったけれど、鳴ったのが一階のオートロックではなく玄関のチャイムだったことから稲垣だとわかる。急がないと入ってきてしまう、と慌てて、けれど慎重に車椅子に移乗する。

「よつと……あ、できた！」

きちんと乗り移ることができた。足を直し、大急ぎで廊下に向かう。途中一度タイヤをドアの角にぶつけたけれど、なんとか稲垣がしびれを切らして入ってくる前

に玄関に辿りつくことができた。

「おかえりなさい！」

三和土までは下りられないので、ぎりぎりのところまで車椅子を進めて大声を出す。ここにいるよ、出迎えに自分で来られたよと伝えるために。

しかし稲垣はなかなか入ってこようとはしなかった。高級マンションだから、防音がしっかりしていて声が届いていないのかもしれない。

「稲垣さん？」

しばらく待ってみたけれど、返事はない。いったいどうしたのだろう——ドアが開くのを待っているのだろうか。いや、それとも何か——鍵をなくしたとか——があつたのかもしれない。

ゆつくりと車椅子から床に下りる。ズボンが汚れてしまうけれど仕方ない。手で自分で洗えばいいだろうとずりずりと下半身を引きずりながら玄関ドアのカギを開ける。

「はあい。おかえりなさい——」

しかしドアを開けた瞬間、そこに見えたのは稲垣ではない男の顔だった。

「え……あ……うそ……」

父親だ、とすぐにわかった。最後に会ってから十年が経っても、脳にはしっかりとその顔がこびりついている。ぼさぼさに伸びたひげには見知らぬ白いものが混じっているけれど、洗うのが面倒だからと短く刈り上げられた頭。ねつとりと絡みつくような目つきは記憶にある父親のままだった。

「雅！ 雅だよな」

ぐい、と外開きのドアが大きく開かれた。それにより、父の隣に立っていた母の姿も視界に入った。

「あ……おかあ、さん……？」

「雅！ 久しぶりね！」

「どうして……」

探して会いに来てくれたのだろうか。会えて嬉しいのに、驚きで感情が追いついてこない。

「ああ雅！ 足、どうしたの？」

「あ……」

母親の視線が室内に移った。車椅子を見たのだろう。父親も気付いたようで、雅を見下ろす。

「大丈夫か？ 事故に遭ったのか？」

「あ、うん……」

少しずつ、本当に両親なのだという実感が湧いてくる。嬉しい。だってもう二度と会えないと思っていた。それに会いに来てくれるなんて想像もしていなかった。

でも、一緒に住んでいる頃もほとんど話したことがなかった。どうやって、どん

なぶうに話せばいいのかわからない。

「いつ事故に？」

「あ……えっと……つい最近、です」

本当は事故ではなく事件だった。しかしあの出来事を、せつかく会いに来てくれた両親に言おうとは思えなかった。

「そう……大変だったのね」

母親が苦しげに眉根を寄せた。その表情を見て、言いようのない喜びが胸にあふれ出てくる。

「あ……うん、でも大丈夫。その、お世話をたくさんしてもらってるから」

「ここの家の人？」

「えっと……うん」

恋人と言っているのか少し悩んだ。しかし相手は男性だし、ヤクザだ。年だつて離れているし、紹介すれば驚かせてしまうかもしれない。それにもし否定的なことを言われたらと思うと怖かった。

「そう。じゃあ今度ご挨拶に来るわね」

まるで別れの言葉。もっと一緒にいたいのに。しかし勝手に家に入れていいのか判断がつかない。

「えっと……」

それに、どうして挨拶は今ではないのだろう。稲垣は家にいないけれど、まるでいないことを知っているかのような言葉だ……と考えて、ドアを開けたときにおかえりなさいと言っていたことを思い出した。しかし母親は少し困ったような顔で切り出した。

「実は……最初は三人で会いたくて、雅が一人になるのを待ってたの」

「え？ え？」

意味がわからなかった。待っていた、とは――。

母親を庇うように、今度は父親が口を開いた。

「雅がここに住んでるっていうのは少し前からわかってたんだ。探してね、見つけたんだ。だが人と一緒に住んでいるようだったから、突然来ても不審がられるかと思ってる」

「あ……そう、なんだ」

じゃあ、今日稲垣が呼び出されなければずっと会えないままだったということか。置いていかれるのは寂しかったけれど、ラッキーだったのかもしれない。

「早く会いたいってお父さんには言ったんだけどね。でも挨拶するのは緊張するし、先に雅と会ってからだってきかなくて」

「おい」

言うなよ、と父親が母親を肘で突く。母親もそれに笑って――なんだか、不思議な感じがした。まるで両親と雅の間に透明のフィルムが貼られているみたい。だつ

て雅は十年間一人ぼっちだったのに、両親はちゃんと「家族」をしている。

「ねえ、雅」

「は、はい」

「……本当にごめんなさいね。探すのにこんなにかかってしまった」

「え……？」

「探してたんだ。母さんと……あの日、家に帰ったら雅がいなくなっていて……それからずっと探してた」

「え……え……？」

だってあの日——雅を置いて行ったのではないのか。ヤクザが集金に来るとわかっていて、置いていったのでは——。

「ええ、そうなの。あの日はお金を……お仕事で抱えた借金を返す日だったの。でもお金を用意できなくて……それでお金を借りるために私とお父さんはいろんなところに行っていて……でも帰ってきたら雅がいなくなっていたのよ。公園とかを探したんだけどどこにもいなくて……次の日、借金返済の手紙が届いて……」

母親が目元を拭った。しわだらけの細い指。どれほど苦労しているのかがわかって胸が苦しくなる。

「送り元には連絡をしたんだが、雅の居所は教えてもらえなかったんだ。本当にすまない」

「お父さん……」

ずっとギャンブルに行っていると思っていた。でも違ったなんて。

「ねえ雅……もう一度一緒に暮らしましょう？」

11万8千字です。ストーリー重視のような感じですが、セックスシーンもかなり多いです。

乳首責め、乳首イキ、目隠し、撮影など。

求める理由2 —サンプル—

gooneone (11万8千字)

2022/1/29

メール:gooneonegooneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter:@gooneone11

ちんぽすけ:gooneone

